

# 多様な集住環境としての団地再編の空間イメージを探る (3) ハマービー・ショースタッド、ヴォーバン団地 の団地再編空間手法

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業  
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

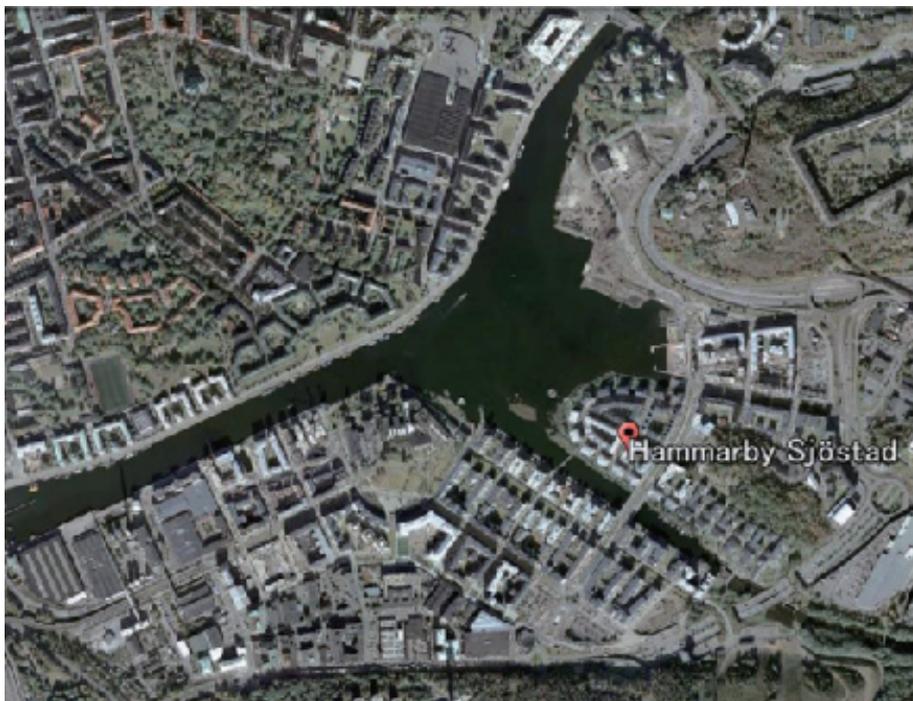
今回は環境に優しく活力のある地域作りをしようという新しく開発された事例に焦点を当てる。団地を再編するにあたって、環境を考えながら作ることがとても重要である。しかし日本では環境に関して様々なことを言っているが、実際に環境を

配慮したエリアゾーンを計画している例はほとんど見受けられない。そこで、実際にエリアゾーンを計画している事例をハマービー・ショースタッド（ストックホルム）とヴォーバン（フライブルク）の2つの団地を例に挙げて説明する。

## 1. ハマービー・ショースタッド （ストックホルム、スウェーデン）

ハマービー・ショースタッドは、スウェーデンのストックホルム市街地からトラムで30分ほど乗ったところにある民間による沿道型配置の新しい環境形成型の開発である。一般的なヨーロッパの閉鎖的な街路型とは違い、この団地では沿道に隙間を作るように建物を配することで、その隙間から奥の建物に空間や景観を見せるという、全体として外部と環境を共生させるという作り方がなされている。

ストックホルムには水面が多く、それに向かうようにしてこのハマービー・ショースタッドでは住宅が建っている。そのため、水面の方向に向かってバルコニーが付いていたり、奥の住棟からも水面が見えるように隙間を提供する配置になっている。日本の場合には、南に向くという配置が重要であるが、ここでは水面に向くという場所の環境に応じた配置がなされている。



航空写真（ハマービー・ショースタッド） Google Earth より



- 抜けを作って配置をしているにも関わらず、沿道感があり、道路沿いの面を透明ガラスで作ることで、道路に極めて開いた雰囲気を感じ出している。
- ピロティを大きく抜くことで、公道の上に住宅を作り、その下をパブリックな道として開放している。民間でこういった開発がなされていることに驚きを覚える。
- 住棟は4.5階建てが基本であり、高層の棟はないが、抜けなどによって重層的な景色が出来ていて素晴らしい。4階程度が人間の住む環境としてのスケール感として適当だと理解している。
- あまり、ここでは車が使われていないが、地域でカーシェアリングがされていたりする。また、道路は片側一車線ほどのもので、車はそこから少し下がった皆から見られるところに停めても良いようになっている。
- また、乳母車を押している人も目立った。押しているのは若い母親だけではなく、非常に高齢者の人もおり、子どもが多いことがよく分かる。
- 断面構成として、中心が高くなっていて、下に向くと必ず水面や空が見えるようになっており非常に考えられている。
- ここでのゴミ置き場は環境に配慮したシステム（地域ゴミ集塵システム）が採用されている。
- イギリスやドイツでも中庭型の配置はよく見受けられるが、その中庭から水面が大きく開いて見えるというのはこの場所ではしかない。
- 隙間があるため、自然の風や視線、光がそこから入り、光の当たり方が集落の様に複雑になっていてとても良い。
- 建物を単純にセットバックし、芝生の部分を多くとることによって舗装部分を減らしており、視覚的にも夏でも涼しい印象を受けるようになっている。



## 2. ヴォーバン(フライブルク、ドイツ)

ヴォーバンはドイツのフライブルクの駅からトラムで30分ほど行ったところにある、トラムの路線を中心に挟んだ民間開発による環境共生街区である。ヴォーバンでは東南向きと南向きの平行配置が混ざっており、中心の大きな道に対してU字型に道が繋がっていて、そこが一つのコミュニティとなっている。ここでは車を町の中に極力入れないよう取り組まれており、集中駐車場を町の外れに配置し、車を持ちたい人はそこに車を置き、またそうでなくて車を使いたい人のために地域全体としてのカーシェアリングをそこでやっている。市街地から出て行くと、広幅員のとれる道ではトラム敷きなどが芝生になっている。

- 大通りに面しているところでは住棟の下の部分がピロティとなっており、それらが繋がって遠くまで大きく抜けている。しかし、部分的に下が道に対して直接面しているところもあり、色んな物が混ざって存在している。
- 全体として、色や形が一つとして同じ物がないと言ってもいいほどに多様性に満ちており、団地にはあまり見えない。その場所に応じてバルコニーがあったり、様々に塗り分けられていたりしており、広場や全部が違うため、そこに住んでいる人は今自分がどこに居るのが凄くよく分かるようになっている。
- 基本的に住棟は階高は高いが4階建てで構成されていて、ペントハウスもある。コミュニティを作りたい場合は低層部をつないで囲ってしまい、パブリックな場所を作りたければ低層を開くといった形で、区画を全部変えている。
- 一棟一棟の建物のプロポーシオンは良くなくても、町全体としてどう見えるかということに重点がかけられている。



航空写真 (ハマービー・ショースタッド) Google Earth より

○生活のコミュニティ単位のことをよく考えた非常に伸びやかな空間配置になっている。実は繰り返しの配置となっているが、単なる繰り返しには見えない多様なものになっている。



○ディベロッパーがお客さん不在で作っている訳ではなく、基本はコーポラティブの形で作り、グループごとに作っているため、様々な形が出来ているのではないかと。そのため、バルコニーの付き方も千差万別で平等性自体をあまり気にしていない。



○ゴミ置き場と自転車置き場も様々な色や形や置き方があり、コミュニティによって全部違っているが、全体の空間のバランスの中で決まっているのであまり気にならない。むしろ、揃えないことがルールとしているのではないかと。



○アイストップとして配置されている住棟は奥行きが浅く、薄い建物になっており、窓を通して向こうまで透けて見えるようになっている。



×繰り返しのなっているところに同じボリュームで色だけを変えている住棟は単調になってしまっている。色々多様にしようとしても、そのやり方が均質だと、一つの大きな建物に見えてしまう。



○生け垣は平気で人が通れるようになっていて、完全にシャットアウトするためのものになっていない。また、植えている木の種類も様々で、季節によって常緑だったり、紅葉したり、花が咲いたりと色々な表情がみられるようになっている。

○奥に電車があり、大通りに直角に住棟があり、奥に山がありそれに向かって開いているという、日本ではあまり見られないが、空間を連動させながら、視界も遠いところと近いところが混ざっており、とても開放的でありながら、町並みを感じさせられていて、配置計画はとても共感を覚える。

○元々ある建物も上手にリニューアルしながら、開いている側に向けてエレベーターや階段室といったパブリックなスペースを付け足している。

全ては町との関係性において出来ている。建物と建物がどういう関係性を持ちながら建っているのかということがこの場所の人たちにとっての機能主義なのかも知れない。使い勝手の機能主義ではなく、町を作っていくための機能主義という印象を受ける。駅の付近では高層なものを作る代わりに隙間を作るように細く建てて、低層と高層でとても良いバランスになっている。見てくれのことばかりを考えがちだが、隙間からどのように見えるか、そういった空間配分がアーバンデザインなのだと思う。光の当たり方もデザインである。それを考えながら、ボリュームを配置し、色や素材をいれていくことが重要である。



関連リーフレット：179

多様な集住環境としての団地再編の空間イメージを探るレクチュアシリーズ (3)  
『ハマービー・ショースタッド、ヴォーバン団地の団地空間再編手法』

発行：2015年5月

レクチャー：江川 直樹（関西大学 教授）  
作成協力：山中 晃（関西大学大学院 博士前期課程）  
宮崎 篤徳（関西大学 先端科学技術推進機構）

（講演：2015年5月11日）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学  
先端科学技術推進機構 地域再生センター  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号  
先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室  
Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)  
URL : <http://ksdp.jimdo.com/>